

日语研究

第4辑

《日语研究》编委会 编

商务印书馆

日语研究

第 4 辑

《日语研究》编委会 编

商务印书馆

2006 年 · 北京

图书在版编目 (CIP) 数据

日语研究第4辑/《日语研究》编委会编. —北京:商务印书馆, 2006
ISBN 7-100-05061-8

I. 日… II. 日… III. 日语—研究—丛刊 IV. H36-55

中国版本图书馆 CIP 数据核字 (2006) 第 059805 号

所有权利保留。

未经许可,不得以任何方式使用。

RÌ Yǔ YÁN JIŪ

日 语 研 究

第4辑

《日语研究》编委会 编

商 务 印 书 馆 出 版

(北京王府井大街36号 邮政编码100710)

商 务 印 书 馆 发 行

河北三河市艺苑印刷厂印刷

ISBN 7-100-05061-8/H·1241

2006年12月第1版

开本 787×960 1/16

2006年12月第1次印刷

印张 20 1/2

定价:30.00 元

《日语研究》编辑委员会

主 编 彭广陆（北京大学）

副 主 编 徐一平（北京日本学研究中心）

续三义（北京外国语大学）

主编助理 潘 钧（北京大学）

编 委 （按汉语拼音顺序排列）

曹大峰（北京日本学研究中心） 陈访泽（广东外语外贸大学）

陈俊森（华中科技大学） 陈力卫（目白大学）

戴宝玉（上海外国语大学） 冯建新（商务印书馆）

冯良珍（山西大学） 高 宁（华东师范大学）

李庆祥（中国海洋大学） 林 璋（福建师范大学）

宋协毅（大连大学） 王亚新（东洋大学）

吴大纲（上海外国语大学） 吴 侃（同济大学）

修 刚（天津外国语学院） 徐敏民（华东师范大学）

许宗华（洛阳外国语学院） 杨 达（早稻田大学）

杨凯荣（东京大学） 姚丽萍（对外经济贸易大学）

于 康（关西学院大学） 于日平（北京外国语大学）

俞晓明（大连外国语学院） 翟东娜（北京师范大学）

张麟声（大阪府立大学） 张 威（清华大学）

张佩霞（湖南大学） 赵 刚（西安交通大学）

赵华敏（北京大学） 朱春跃（神户大学）

朱京伟（北京外国语大学）

卷 首 语

《日语研究》第4辑又与读者见面了。本辑除了特约的日本东京大学人文社会系研究科铃木泰教授的论文外,共收录了19篇论文以及综述及书评。本辑论文中,年轻学者特别是正在攻读博士学位的学者的论文引人注目。它标志着我国国内日语研究新人的崛起,是很值得欣慰的事情。

在本辑中,首先想给读者着重介绍的是开卷第一篇的铃木泰教授的“古代日本語の「思ふ」の條件形における主語の交代現象”。针对先行研究中对「思ふ」语义分析存在的不足,论文首先考察了作为条件形的「思ふ」所连接的分句中主语的异同,从语言的实际运用出发,得出了两个分句主语可以相同也可不同的初步结论。在此基础上,论文分析了之所以出现这种情况的原因,结果发现,分句主语的异同与「思ふ」的形态有关——采用「タリ・リ形」的前后主语会发生变化,而采用「はだかの形(光杆形)」的,前后主语不发生变化。主语发生变化的「思ひ」,后续谓语原则上是表示态度的动词,而不发生变化的「思い」,后续谓语则是表示思考和认识的动词。而这一点,又在于「タリ・リ形」的客观性与「はだかの形」的主观性。同时,「思ふ」的语义还与由它所组成的「連語」(词组)有关。对此,论文转述了奥田靖雄有关「連語」的论述。奥田靖雄先生在“を格名词和动词的组合”一文中,对于表达“认识”和表达“态度”的「連語」分析如下:表示认识的组合的「連語」将对象纳入认识之中,从而可以单纯地表达所形成的认识论性的关系;而表示态度的组合的「連語」,所表达的是对于对象的感情、评价、判断、把握方式等,一言以蔽之,即对于对象的态度。同时,将有关“态度”的「連語」从动词「思ふ」与所结合的成分的不同出发分为“感情性态度”和“理智性态度”。根据这种分类原则,论文进一步确认了古代日语「思ふ」两个形态的语义取向:「タリ・リ形」——“态度”,「はだかの形」——“思考·认识”。可以说,从形态、语法关系,再到「連語」,这一系列探讨,给我们提供了一个十分典范的语

义研究模式,很值得我们借鉴。

本辑中有关语义学或从语义学研究理论出发的研究比较突出。王轶群的“日语和汉语的复合移动动词”通过对日语和汉语复合动词前后项语义的分析认为,不论是前项表示后项的移动方式、附带状况还是前项表示后项的手段、原因,日语的复合移动动词(包括表移动的复合型谓语)与汉语的复合移动动词虽然从形式上看有很多是相互对应的,但是实际上却存在本质的差别,即日语的构词遵循及物性协调的原则,而汉语则遵循有界性原则。日语的复合移动动词,前项表示的移动方式、附带状况以及手段、原因,与后项表示的位移动作为同一主体发出,前项与后项相互伴随、同时发生;汉语的复合移动动词,后项表示前项动作造成的位置变化(或状态变化)的结果,为前项设定界限,使之有界化,并不要求前后项为同一主体。可以说这一研究,比较清晰地揭示了汉日两语复合移动动词语义差异的关键,是一篇十分值得一读的论文。

刘剑的“日汉语非宾格动词类对比刍议”在对非宾格动词现象和目前对该现象的研究作了基本介绍的基础上,对日语中的非宾格动词和日语中特有的“-ar-形自动词”进行了对比和分析,并对-ar-形自动词的域外论元在何处抑制,以及为何抑制不完全等问题提出了自己的见解,与此同时,对汉语的非宾格动词以及第三种不及物动词——使成式(诸如“拉紧”“拴牢”之类)进行了考察。

杨玲的“Vテクレル的结构和意义”从“结构和意义”的立场出发,强调意义的重要性,着眼于前项动词的论元结构和语义特征并对其进行分类,对授受句的多义性进行归纳和分析。从表意的角度把授受句分为“物授与”(「モノの授受」)和“非物授与”(「非モノの授受」)两大类别进行考察,并以「(テ)クレル」的“话语者指向性”为基点,阐述了「(テ)クレル」语义扩张变化的路径。这两篇论文也都值得一读。

另外几篇有关语义研究的论文,如费建华的“形容词作结果副词的条件”分析了形容词作结果副词时的语义特征,刘艳文的“时间从句「P前に」与「Pない前に」”分析了两种时间从句与主句之间的各种关系,譙燕的《中日重叠式名词意义的对比研究》分析了两种语言重叠式名词语义的异同等,

也各有千秋。

本辑中另一个特点是有关语用学研究的论文。赵刚、邹维的“听话人会话策略的日汉对比分析”通过对语言实际的考察,将日汉语的会话策略归纳为:1)附和式;2)优先式;3)补充式;4)重复式;5)插话式;6)修正式;7)应答式;8)引发式,并对各种策略进行了较为详细的分析。

另外,杨晶的《对中国学习者运用日语「相づち」的实证性研究》也通过对被试者的会话表达音像资料的分析,对以汉语为母语的日语学习者和以日语为母语的人会话中「相づち」使用的情况进行了统计性分析,对这种会话策略归纳总结为:i 固定词语(「相づち詞」);ii 复述(「繰り返し発話」);iii 变换说法(「言い換え発話」);iv 接话茬(「先取り発話」);v 意见和感想(「コメント」);vi 点头动作(「うなずき」)等6类。可以看出,在分析过程中,两篇论文使用的术语有所不同,有些术语还可商榷:如赵刚的“附和式”和杨晶的“固定词语”是否可用“搭腔式”;赵刚的“优先式”和杨晶的“接话茬”是否可用“抢答式”等等,学术研究、特别是我们所从事的日汉语言研究上的术语问题也还需进一步准确、规范化——这是需要所有从事这一方面研究的学者的共同努力。尽管如此,这两篇有关语用学问题的研究论文,也还是很值得一读。

在对于语气(情态)的研究上,本辑中张兴的“所谓表示疑感情态的「だろうか」”、李琚宁的“从语料库看“可以”与「してもいい」的对译情况”和王晓华的“评价性语气「べきだ」的意义结构”也都各有特色。

日语的指示词コ、ソ、ア系列一般称为“三项系列”,而汉语的指示词“这、那”一般称为“两项系列”,因此,在学习日语时,用汉语的“两项系列”去对应日语的“三项系列”往往会失于片面,而简单地将日语のソ系列译为汉语的“那”,在很多情况下也都有失于片面之嫌。王亚新的“ソ系指示词的指称功能与汉译”首先指出了日语指示词的语义功能,在指出汉语指示词以说话者为参照点、日语中缺少第三人称指示词而以ソ系列词来替代等特点的基础上,从“现场指称”、“时间指称”、“承前(篇章)指称”以及“对比和区分意识”等几个方面对ソ进行了较为全面的探讨。其中在有关“承前指称”的论述中,认为篇章中的指称继承了现场指称的部分语义特征,空间距离的远近

转变为一种心理距离的远近,指称中同样伴随有时空、心理的远近以及话题和非话题等等附带语义色彩。在这里,コ不是一种单纯的回指,而是提示一个要说明的话题对象,如果不是被说明对象,则只能使用ソ,而这种情况在汉语中一般不使用指示词,这就造成日汉不对应。论文从空间的、时间的以及心理的距离的角度对ソ进行了论述。只有这样,我们也才有可能全面地把握日语的指示词。

本辑中还有王学群的“现代日语时体研究述评”等几篇论文。相信本辑能够给读者提供一餐丰盛的日语研究的筵宴。

《日语研究》编委会

目 录

卷首语	《日语研究》编委会(1)
-----------	--------------

特约论文

古代日本語の「思ふ」の条件形における主語の交代現象	鈴木泰(1)
---------------------------------	--------

论 文

ソ系指示词的指称功能与汉译	王亚新(22)
日语和汉语的复合移动动词	王轶群(42)
日汉语非宾格动词类对比刍议	刘 剑(55)
形容词作结果副词的条件	费建华(74)
现代日语时体研究述评——以「言語学研究会」为中心	王学群(93)
时间从句「P前に」与「Pない前に」	刘艳文(120)
「Vテクレル」的结构和意义	杨 玲(133)
所谓表示疑问情态的「だろうか」	张 兴(153)
从语料库看“可以”与「してもいい」的对译情况	李琚宁(167)
评价性语气「べきだ」的语义结构	王晓华(186)
《雪国》中可能态“可能”义项的汉译及其问题	吕达珊(197)
汉日重叠式名词意义的对比研究	谯 燕(208)
『今昔物語集』“被”字被动式研究——以「天竺部」「震旦部」之 具体实例为中心	杨金萍(223)
中古汉语三等介音在日译吴音中的转写方式	李 香(236)
听话人会话策略的日汉对比分析	赵 刚 邹 维(250)
对中国学习者运用「相づち」的实证性研究	杨 晶(263)

周作人译石川啄木短歌中的误译分析	吴小瑾(279)
------------------------	----------

书 评

评朱立霞著《现代日语省略现象研究——从认知语言学与语用学的角度》	翟东娜(289)
评尹松著《日语听力教学法的实证性研究》	何 琳(298)

编者后记	(305)
来稿注意事项	(306)
英文目录	(309)
《日语研究》第1辑目录	(311)
《日语研究》第2辑目录	(313)
《日语研究》第3辑目录	(315)

古代日本語の「思ふ」の条件形 における主語の交代現象

東京大学 鈴木泰

提要 古代日本語「思ふ」の条件形, 当其以タリ・リ的形式出现时, 先行从句和后续从句的主语发生交替现象; 当其单独出现时, 前后从句为同一主语。主语交替, 表达的是他人对于某个人物思想活动的认知, 并以此为契机进行活动的情况; 主语不发生交替, 则表达的是主体根据自身的思考进行活动的情况。原则上, 指称前者的思维活动时一般使用表示态度的动词, 指称后者的思维活动时使用表示思考・认识的动词。表示态度的动词通过タリ・リ的形式来体现思维活动的客观性; 而表示思考・认识的动词以单独出现的方式来体现其思维活动的主观性。

关键词 思ふ 条件形 switch-reference 連語 タリ・リ形 はだかの形

1. はじめに

源氏物語において、近江の君から、女御に消息がとどいたとき、女房の中納言の君がそれを見たそうにしているのを知って、女御がそれを見せる場面は、

(1)「いと今めかしき御文の気色にもはべめるかな」と、(中納言の君が)ゆかしげに思ひたれば、「草の文字はえ見知らねばにやあらむ、本末なくも

見ゆるかな」とて(女御が)賜へり。(源氏・常夏)[「本当に当世風のお手紙らしゅうございますね」と言って、中納言の君が近江の君からの文を見たく思っている様子なので、「私には草仮名はよく分からないからでしょうか、始めも終わりもないように見えます」と仰って、女御が御下げ渡しになった]

となっている。このように、条件を表わす「思ふ」がタリまたはりを有している(タリ・リ形の)ときは、条件形をとる先行節とそれに後続する節とで、主語が交代するという原則がかたく守られている。それにたいして、夕霧が息子柏木をなくした致仕大臣を見舞ったとき、あまりの大臣の落胆ぶりに同情して、落ちる涙を隠そうとする場面は、

(2) 見たてまつりたまふよりいと忍びがたければ、(夕霧は)あまりをさまらず乱れ落つる涙こそはしたなけれ、と思へば、(夕霧は)せめてもて隠したまふ。(源氏・柏木)[柏木の死に父の致仕大臣の悲しみはおおきく、夕霧は、その顔を拝されるなり、まったくこらえきれず、あまりにもとめどなく、乱れ落ちる涙をみともないと思うので、しいて隠そうとなさる]

となっている。このように「思ふ」がタリやりのない(はだかの形の)条件形になっている場合は、条件形をとる先行節とそれに後続する節とで、主語が変わらない。このような違いが生ずるのはなぜなのかを考えてみる。

上の二つの例から、主語が交代する場合(1)とは、ある人物(中納言の君)の思いを他者(女御)が認知し、それを契機として、他者(女御)が活動することを表わそうとしているときであり、主語がかわらない場合(2)とは、主体(夕霧)がみずからの思いを理由として、活動することを表わすときであるといえる。

前者のような出来事関係においては、他者が認知できるために思いは客観性のあるものであることが必要であるが、後者のような出来事関係においては、動機としての思いはその行為者にとっては自明のものであり、主観的に把握されていれば十分なものである。このように、地の文に

において、動機としての思いが主観的に把握されたものとしてさしだされているということは、語り手が後続節の行為者、(2)でいえば涙をかくす夕霧の立場にたって描写しているということになろう。

したがって、前者に用いられる、タリ・リ形は、その思いが客観性をもっているものであることを示すものであるといえる。また、後者に用いられる、はだかの形は、その思いが主観的なままに置かれていることを示すものであるといえる。

この思いの客観性と主観性は何によって決まってくるのかというと、結論的にいうなら、思いが態度を表わしているか、思考・認識を表わしているかによって決まってくる。二章では、条件形の「思ふ」における主語の交代と非交代の現象を確認し、三章以下では、主語が交代するかしないかが「思ふ」が態度を表わしているか、思考・認識を表わしているかによって決まっていることを明らかにしたい。そこで、二章においても、それぞれの用例の「思ふ」が態度なのか思考・認識なのかを示すことにする。用例の頭に、白抜きの数字で示されたのが態度、黒字で示されたのが思考・認識を表わす場合である。

2. 条件形の「思ふ」における主語交代と非交代

まず、条件形のタリ・リ形の例を通覧して、この主語交代のきまり (switch-reference) の存在を確認しておこう。この事象は、すでに Long, E. 1990 によって確認されているが、それをうけた岡本祐子 (1998) によれば、「思ふ」の条件法がはだかの形をとる例とタリ・リ形をとる例が十分にある資料は、源氏物語だけであるので、以下では源氏物語の地の文の条件形について考察する。

《タリ・リ形》

① いといたう瘦せ青みて、ほれほれしきまでものを思ひたれば、心苦しと見たまひて、まめやかにとぶらひたまふ。(源氏・総角)[大君の死にうちのめされて、ほんとうにひどく青ざめて、まるで気抜けしたように薫が消

沈しているので、匂宮はいたわしくお思いになって心からお悔やみをおっしゃる]

②「いざたまへ。宮の御使にて参り来つるぞ」とのたまふに、あらざりけり、とあきれて、おそろしと思ひたれば、「あな心う。まろも同じ人ぞ」とて、かき抱きて出でたまへば、(源氏・若紫)「さあいらっしゃい。父宮のお使いでうかがったのだ」とおっしゃると、父宮ではなかったのかと、途方にくれて、若君がおそろしく思っていたらっしゃるようなので、源氏は「なんと情けない。私も宮と同じ人です」と言って、抱いてお出になる]

③ものなどもきこしめさず。朝餉の気色ばかりふれさせたまひて、大床子の御膳などは、いとはるかに思しめしたれば、陪膳にさぶらふかぎりは、心苦しき御気色を見たてまつり嘆く。(源氏・桐壺)「お食事などもお取りにならず、朝餉にしるしばかり箸をお付けあそばして、帝が大床子の御膳などはまるでお心にもない御様子なので、お給仕をつとめる者はひとり残らず、このいたわしい様子を拝しては嘆息する]

④右近は、何の人数ならねど、なほその形見と見たまひて、らうたきものに思したれば、古人の数に仕うまつり馴れたり。(源氏・玉鬘)「右近はこれというほどの者でもないが、やはりあの人の形見とごらんになって、源氏がいとしい者と思っていたらっしゃるので、右近は昔からの女房並みに長く源氏の君のおそばにお仕えしている]

⑤「苦しきまでもながめさせたまふかな。御碁を打たせたまへ」と言ふ。「いとあやうこそはありしか」とはのたまへど、打たむと思したれば、盤取りにやりて、(源氏・浮舟)「少将の尼が、浮舟に「おそばの私もつらくなるほど思い沈んでばかりいらっしゃいますね。碁をお打ちあそばせ」と言う、「ほんとに下手だったものですから」とおっしゃるけれども、浮舟が打つてみようというつもりになられたので、少将の尼は碁盤を取りにやる]

⑥殿上の若き人々もこの事まねぶをば、御心とどめてをかしきものに思はしたれば、まして、をかしげなる人の、心ばへあるさまに、まほならず描きすさび、なまめかしう添ひ臥して、とかく筆うちやすらひたまへる御さ

ま、らうたげさに御心しみて、いとしげう渡らせたまひて、ありしよりけに御思ひまされるを、権中納言聞きたまひて、あくまでかどかどしく今めきたまへる御心にて、我人に劣りなむやと思しはげみて、すぐれたる上手どもを召し取りて、いみじくいましめて、またなきさまなる絵どもを、二なき紙どもに描き集めさせたまふ。(源氏・絵合)[帝は、大変に絵をお好みになっていて、若い殿上人などでも、絵を習う者に目をおかけになり、お気に入りあそばすので、まして美しい斎宮女御が趣ある様子にのびのびと筆をもてあそび、やさしく物によりかかり、筆をとめて考えていらっしゃるご様子、その愛らしさにお心がひかれて、たびたびお渡りあそばして、これまで以上にご寵愛が深くなっていくのを、権中納言はお聞きになって、どこまでもまけずぎらいの、現代風にはきはきとしていらっしゃるご性分から、自分が人に圧倒されてよいものかとお心をふるいたたせて、すぐれた名人たちをお召し寄せになって、きびしく注意して、類なくみごとな絵の数々を、最高に良質の紙に幾枚もお描かせになる]

これらのように、「思ふ」の条件形がタリ・リ形になっているときは、後続節の主語が先行節とちがっていて、ほとんど例外がない。このようなきまりが存在するのはなぜなのかを以下で考えてみたい。

すると、すでにのべたように、これらの例からも、主語が交代する場合は、ある人物の思いを他者が認知し、それを契機として、他者が活動することを表わそうとしているものであることが知られる。ある人物の思いを他者が認知できているということは、「思ひたれば」で表わされる思いに客観性があることである。それは、まず文脈中にその証拠があることによって明らかにされる。例えば、〈はじめに〉の例(1)では、中納言の君が「本当に当世風のお手紙らしゅうございますね」と言っているところに、見たいと思っているという中納言の君の思いが客観化されている。また、後で示した例①においても同様で、「ひどく青ざめて、まるで気抜けしたよう」であるという状態によって、薫の状態が客観化されている。

しかし、それだけではなく、(1)では、中納言の君が見たいという思いは、「ゆかしげに」という接辞ゲをもつ形容動詞とのくみあわせで表わさ

れていることによっても、それが客観的なものであることが知られる。本来「……げなり」という形容動詞は、心中が外面にあらわれた様子を表わすものであって、「思ふ」ことの内容にはなりえないものである。それがあえて限定としてはたらいっているのは、「思ひたり」がすでに心理的活動ではなく、そのような振りをするというような、外面的な活動を表わすものになっているということであろう。

また、㉒～㉓は、後続節の主語が何らかの反応をする以前に、その思いが客観化されていることを示す証拠は文脈にはあらわれていないが、後続する節の主語の反応は、やはりその思いが客観化されていなければ、とりようもない種類のものである。㉒で、源氏が同じ人間だと言って安心させるのは、若君が恐ろしいと思っていることを認識しているからであり、㉓で給仕たちが嘆いているのは、帝が食卓に上の空であることを確認しているからであり、㉔で、右近がつかえているのは、源氏が自分のことをいとしく思っていることを知っているからであり、㉕で尼君が碁盤を取りにやったのは、浮舟が碁をうちたいと思っていることを認識したからである。

以上、態度を表わす「思ふ」のタリ・リ形の条件形には、基本的にある人物の思いがさしだされ、それを客観的なものとして目撃するなどして確認している別の人物が対応するという文脈に出現する。思いを有する人物とそれに反応する人物が同じ帝であるという点で、この例外になるかと思われるのが、㉖である。本例を文脈の時間的展開にそって見るなら、帝の「をかしきものに思ほしたれば」という思いは、斎宮女御にいつそ目をかけられているという同じ帝の態度に後続していくわけなので、主語はかわらないということになる。確かに若い者でも絵を習う者には目をおかけになるという帝の態度が娘のためにさまざまな絵師をあつめて絵をかかせるという権中納の反応をひき起こしているのだが、権中納はそうした帝の態度を直接に確認しているわけではなく、「ありしよりけに御思ひまされるを、権中納言聞きたまひて」とあるように、それを耳にして、絵師に絵をかかせているわけなので、帝の態度に対しての行為であ

と考えことはできるが、権中納の反応は帝の思いが客観性をもつことを示すものではない。

以上のように、地の文では、「思ふ」のタリ・リ形が条件を表している先行節とそれに後行する節とで、主語が交代するという原則は地の文ではかなりしっかり守られているが、会話文では先行節がタリ・リ形になること自体がまれであり、1例しかない。その会話文の例は⑦であるが、この部分については、異文がおおく、日本古典文学大系のよる本文のように、リ形でない「思ひたまふれば」になっている本文もおおい。これをタリ・リ形であると考え、話し手みずからの動作に尊敬表現が用いられていることになるなどの矛盾も生じ、むしろはだかの形の方が理解しやすいということから、これについてはタリ・リ形の例と考えることにする。

⑦「さてさぶらはんにつけても、もののみ悲しからんを思ひたまへれば、いま、この御はてなど過ぐして」と聞こゆ。(源氏・蜻蛉)[匂宮が侍従に、自分に仕えればいいと言うと、侍従は「そうしておそばにお仕えいたしますにつけても、ただ何事も悲しいことばかりと存じますので、今しばらく主人浮舟の御忌みなどをすませましてから参ります」と答える]

《はだかの形》

次に地の文のはだかの形の述語においては、後続節と主語の転換がないことを確認したい。後続節の述語は、動詞がもっとも多いが、タリ・リ形の場合とちがって、その否定形もかなりの数にのぼる。

①心地はたわびしく、あるまじきことと思へば、あさましく、「人違へにこそはべるめれ」と言ふも、息の下なり。(源氏・帚木)[源氏に言い寄られて、空蟬の気持ちは情けなく、けしからぬことと思うので、空蟬はあきれて、「人違いでございましょう」と言うのも、声にはならない]

②かひなきものから、人目のあいなきを思へば、よろづに思ひ返して出でたまひぬ。(源氏・宿木)[薫は、何のかいもないことながら、人目の悪いことをおもんばかりであれこれと思い返して匂宮邸をお立ち出でになっ